

〈研究ノート〉

柳田国男と西岡虎之助

——「柳田文庫」所蔵の西岡著『民衆生活史研究』書き入れを中心に——

今井 修

一

成城大学民俗学研究所「柳田文庫」の蔵書中に見られる柳田国男の書き入れについては、伊藤幹治氏が『柳田国男と文化ナシヨナリズム』（岩波書店、二〇〇二年）『柳田国男と梅棹忠夫―自前の学問を求めて』（岩波書店、二〇一一年）などで、J・G・フレージャーをはじめとする主としてヨーロッパの民族学（文化人類学）や民俗学の諸文献への書き入れを紹介・検討しておられるように、大変興味深いものがある。柳田の「一国民俗学の創出過程」の考察にとって直接的に有効であるばかりでなく、柳田旧蔵書の書き入れ類を全体的に調査して総合的に分析することは、柳田の研究スタイルや同時代研究者への批判・交流の諸相を具体的に説明していく上でのがかりともなるであろう。

筆者の関心からすると、「歴史」関係蔵書への書き入れの有無が気になるところであり、西岡虎之助（一八九五—一九七〇）、津田左右吉（一八七三—一九六一）、家永三郎（一九一三—二〇〇二）の三人についてまずチェックしてみたいところ、単行本にはすべてではないが、かなりの程度の書き入れがはいっていることが確認でき、あらためて柳田との関

係を検討する上で有益な資料となるものであると判断した。柳田の「一国民俗学」が「既成の文献史学への反措定を特色の一つ」とするものであれば（前掲伊藤『柳田国男と文化ナシヨナリズム』、七五頁）、柳田の日本近代史学・戦後歴史学への批判的まなざしをより個別具体的に理解することは重要であり、一人ひとりの歴史家・歴史書・論文等への書き入れの悉皆調査と分析は、柳田国男研究にとつても看過し得ない課題といえるのではなからうか。

小稿では、紙幅の関係もあり、西岡虎之助についてのみまず研究ノートのかたちで紹介し、両者の学問的関係の本格的考察のための第一歩としたい。^①

二

「柳田国男と西岡虎之助」については、西岡の一周忌にあわせて刊行された『西岡先生追想録』（発行者西岡由紀男、一九七二年二月）収録の和歌森太郎「民衆生活史の開拓者」が言及し、それをふまえて西垣晴次「西岡虎之助」（今谷明ら編『20世紀の歴史家たち』5）日本編統、刀水書房、二〇〇六年）も「同時代の研究者と西岡」の項を立てて、津田左右吉とともに西岡と柳田の関係について論じている。

小稿にとつて参考になる箇所を抄録すると、和歌森の追想において、

私は師の柳田国男先生のお宅に赴いて、この西岡先生の業績について若干の感想を述べようとした。ところが既に柳田先生もこれ（『民衆生活史研究』―引用者注）を読んで居られ、「西岡君は表にはなかなか出さないが、僕らのものを読んでいるね」と洩らされた。文献史料に終始したような体裁の論文の中でも、その解釈には、民俗学からつか

んだ考え方で照らしていることが多々気づかれる。そのことを言われたものようである。

ちょうどこの本が出た前年に、西岡先生は『日本民俗学のために』という、柳田先生の古稀記念論文集の第四輯に「上代土豪の歴史」という論を寄せられた。或る一族一家の盛衰を丹念に追跡していくのは、西岡先生がすこぶる得意とした手法で、その類の論文は少くないのだが、これもその一つであった。山村生活の研究や農民史に深い関心を注いでいた柳田先生も家一族の栄枯を、その経済条件とからめて伝承資料からたどる態度をとっていられたが、西岡論文は、その地方史版ともいべき印象を与えてくれた。

と記され、西垣論文では、右の和歌森の「理解」を紹介した上で、

一方、西岡は「わたくしの読書遍歴」のなかで柳田の『海南小記』『雪国の春』『都市と農村』などを読み、これまでにない感銘をうけたとし、戦後の啓蒙的な文章には、好意的に民俗学の著作が紹介されている。それだけでなく、昭和初年に有賀喜左衛門や中村吉治らの指導をうけながら信州の伊那富小学校的教員の手により刊行された雑誌『郷土』の二巻一・二・三号（一九三二年七月）に「石をめぐる経済史話」を発表している（この論文は著作集四の著作目録にはみえない）。

ことを指摘し、柳田の古稀記念論文集寄稿の「二人の歴史家」、肥後和男と西岡について、「長い時間軸を前提に論を展開する」共通の方法的特色があり、「柳田が肥後と西岡の二人に論文を依頼した背後には、二人の歴史家の目指す歴史像と柳田が考えていた歴史が交わるところがあると推測しても誤りではないであろう」と述べていることなどが、さしずめふまえておかなければならない点である。

このうち、雑誌『郷土』の「石」特輯号は、『石神問答』を記念して発行された寄稿者七〇名をこえる三七二頁の大冊で、柳田には特装本（二〇〇九年度の成城大学民俗学研究所特別展「柳田國男の交友——日本民俗学創成の道程——」で重点展示されて注目を集めた）として献呈されたもの（西岡論文のタイトルは正確には「石を繞る経済史話」で、七三—七六頁所収の短編である）、古稀記念論文集の方は、鶴見太郎『民俗学の熱き日々』（中公新書、二〇〇四年、一〇一頁）によれば、西岡は五項目に分類されたなかの最後の「先生の友人其他」として執筆依頼リストにあげられたものらしく、同論文はのち西岡の名著『荘園史の研究』下巻一（岩波書店、一九五六年）に収録されている。あらかじめ記しておけば、この二論文については「柳田文庫」のそれらには柳田の書き入れはない。

三

『増補柳田文庫蔵書目録』（成城大学民俗学研究所、二〇〇三年三月）に挙示されている西岡虎之助の著作は、改訂

④ 「荘園制の発達」〔『岩波講座日本歴史』、一九三三年〕

⑤ 『新日本史図録』上（中央公論社、一九五二年）

⑥ 『民衆生活史研究』（福村書店、一九四八年）

の三点である（以上『目録』掲載順）。④は冊子体の講座論文であり、純粹に単行著書は⑤⑥の二点、しかも⑥は図録であるから研究論文集は⑤の一点のみだといつてよからう。西岡の名著である前掲の『荘園史の研究』三卷（岩波書店、一九五三—五六年）や⑥の姉妹編ともいえる『日本文学における生活史の研究』（東京大学出版会、一九五四年）『日本女性史考』（新評論社、一九五六年）、歴史・歴史教育論をまとめた『歴史と現在』（修道社、一九五六年）、さらには戦前刊行の二冊の

時代史、『日本文化史 第四卷 平安朝中期』（大鏡閣、一九二二年）『綜合日本史大系 第二卷 奈良朝』（内外書籍、一九二六年）などは所蔵していなかったことになろうか。ただし、『目録』では諸雑誌や各種論集掲載の初出論文レベルまでは挙示していないから、すでに言及した二論文の場合のように、西岡の「著作目録」と照らし合わせつつ「柳田文庫」中の関係雑誌・論集その他を悉皆調査して必要だが、今回はそこまでの完全を期したものでないことをお断りしておく。

本題にはいる。④⑤の二冊にはまったく書き入れはなかったが、⑥の『民衆生活史研究』を手にしてまず驚いたのは、見返し（遊び）に「欠点」として八行の読後感ともいふべきメモ書きが赤ペンで記された紙片（縦一七センチ、横一一・五センチ）が貼付されていたことである。柳田自身が貼付したものでどうかまではわからないが、少なくともこのメモ書きが本書にはさみこんであつたものであろう。つぎに引用する。

欠点

用語カ六ツカシクテ説明カ徹底セヌ憾ミアリ

資料ガ文藝ニ偏シテキル文藝ニハ誇張多シ

浄ルリハ決シテ写真ノ文ニアラズ、例ニ引キガタシ

江戸人ノ書イタ田園文学アテズツポウバカリ、方言モ誤リダラケ也

江戸ノ資料年代カマハズ列記ハコノ間ノ変移ヲトカズ

資料ノ價値等動ク考ヘズ

材料ノ分析足ラズ却ツテ説明紛糾ス

古文書ヲ引カズ故ニ所説多クハ空疎外部人ノ筆ナレハ

というのがその全文で、一読すると「正統的」文献史学者風の厳しい批判のように受けとれるくらいに、西岡の方法や叙述の難点、とくに文藝の歴史資料としての扱い方についての問題点を鋭く列挙している。たしかに、西岡論文についてわれわれが読んでも危ういと感じられ、不満に思う点（それは他と異なる特色として評価できるものでもあるのだが）を、柳田もまた「欠点」と考えたことがこれによってわかる。

『民衆生活史研究』は、「経済に焦点をおいた民衆、とくに農民の実際生活の歴史を、できるだけ具体的につかむこと」（同書「はしがき」）を目標として、昭和初年以來、とくに戦中期の皇国史観台頭への抵抗姿勢を持続しながら鋭意書きためてきていた諸論文を、戦後になっていちはやくまとめたものであつて、「ただもう民衆の生活に焦点をおいた歴史がほんとうの歴史である」（同上）とするつよい信念に貫ぬかれた、日本近代史学史上では戦中・戦後初期の民衆史研究の文字通り先駆的業績であるとの高い評価が与えられる。A5判本文六九二頁の大冊で、つぎに列挙する一〇本の論考で編成されている（便宜通し番号をつけ、文末付記の執筆年月のみ注記して、掲載誌等は割愛する）。

- ① 「国史学における民衆的文化要素の重要性」（一九三八年二月）
- ② 「日本の農家における自給経済生活の史的展開」（一九四六年四月）
- ③ 「上代文学に現われた民衆生活」（一九三二年一〇月）
- ④ 「上代歌謡に現われた女性の生活」（一九三一年一月）
- ⑤ 「上代における中層民および下層民の生活」（一九三三年八月）
- ⑥ 「中世歌謡に現われた農民の生活」（一九三九年二月）
- ⑦ 「中世農民の経済的日常生活」（一九四六年五月）
- ⑧ 「近世農村生活の実態」（一九四七年六月）

- ⑨ 「近世における一老農の生涯」(一九二八年七月)
 ⑩ 「社会結合における階級と身分」(一九四六年七月)

このうち、①②④⑤⑥をのぞく③⑦⑧⑨⑩の五つの論考には、ことごとく下線や▽印と○印、そして?印のチェックがはいっており、余白部分へのコメント書き入れが四箇所、さらに付箋も四箇所にはさまれていて、柳田がかなり念入りに本書の大半を通読・検討したことが歴然である。前掲の和歌森の追想が裏付けられるとともに、貼付の「欠点」メモ書きもこれらの作業をおこなった上での「総評」にあたるものだろう。

柳田のチェックについて少し具体的にみていきたいが、まず③論文の初出(「王朝文学に現はれたる庶民生活」が原題)は、『岩波講座日本文学』であり、柳田旧蔵の冊子体のそれが「堀文庫」の方に収められていて(柳田の女婿堀一郎の蔵書中には柳田旧蔵書からの贈呈本も含まれている由を成城大学民俗学研究所の林洋平氏から御示教いただいた)、その末尾の余白に赤ペンで柳田のつぎのような読了を示す自記がはいっていることが確認できた。

昭和十年八月二十八日了 茅ヶ崎にて

此人文藝ハ皆写生だと思つて居る

本文中には書き入れはないものの、これによると柳田は③論文をまず初出で通読し、さらに『民衆生活史研究』で再読して、書き入れもおこなったことが判明する。とくに「此人文藝ハ皆写生だと思つて居る」との簡潔な批評は、さきに紹介した「欠点」メモとまったく共通して、柳田の批判点が初読の時点からあったことを明示している。③初出は、『文学』第六号(一九三一年一月)「編輯後記」によると、本来は「王朝文学に現れた宮廷生活」と題して西岡虎之助氏に御願

ひしたものは都合で「王朝文学に現はれた庶民生活」として御原稿を頂き今回の配本に入れた」とあり、「宮廷」(貴族生活)よりも「庶民」(民衆生活)をより重要視する西岡が依頼題目を「無視」して我を通したらしい講座論文であったわけで、そのこと自体興味深くもあるが、用いている資料は「専ら散文文学に拠」るとし、物語と日記、なかでも一番利用しているのは今昔物語である。『研究』本文では、「生活形態」「生活形態の転化」「新生活形態の発生」の三項目のうち、はじめの「生活形態」の項に集中的に上記の符号がはいっている(とくに一二八―一四三頁にかけて)。付箋三箇所も③論文である(一二九、一三一、一四三頁)。

ところで、柳田の書き入れ符号については、それが具体的にどういう意味あいのものであるかは本書のそれのみでは判然とせず、「柳田文庫」の書き入れの性格を全体として慎重に考察した上でなければ、ここからただちに何らかの意味を見出して論点を引き出すことは危険であるし、してはならないことである。今後の課題であるが、前掲伊藤『柳田国男と文化ナショナリズム』で、生活社版『金枝篇』第一冊の奥付にあるつぎのような柳田の自記を紹介して(六五―七一頁)、

昭和十九年三月三十一日了 柳田国男

○ハ我邦として考へられる問題、こちらにもある例

✓ハ注意すべき考へ方又事実

『第一冊(上巻)の奥付にある自記は、彼の読み方の一つの原則を示したものととして留意すべきであろう』との指摘があることは大変ありがたい。この場合の○印は欧米文献を日本のフォークロアと対比させながら読もうとしてのことであるから、『民衆生活史研究』のそれにはあてはまらないのはあきらからであるが、✓印の「注意すべき考へ方又事実」というのは広く参考にできよう。

柳田のチェックのはいっている論文のなかで、その一番おびただしいのは⑧「近世農村生活の実態」である。山喜房から刊行した『老農渡部斧松翁伝』を改題して収録した⑨は別にすれば、一六〇頁を超す新稿の最長編であり、柳田の「欠点」メモも「江戸」すなわち近世の事例が主になっていることを考えると、この⑧論文こそが柳田が熱心に目を通したものであったにちがいない。⑧論文にたいするチェックで何よりも顕著なのは、本文割注で西岡が示している典拠資料名の大半にV印(六一)と下線(三四)がいられてあることである。この二種の区別が何にもとづくものかにはわかに判断がつかないが、文藝作品やいわゆる雑書の類を好んで利用し、豊富に引用・駆使しながら、「近世農村の成立過程」「平和な生活面」「特殊な生活面」「不安な生活面」「近世農村の性格的転換」の五項目立てで「近世農村生活の実態」を具体的に説き明かし、一つのきわめて具象的な史的映像がかたちづくられている力作であった。

「日本民俗学は広義の歴史学」であって、柳田提唱の民間伝承の学が、「民間伝承を資料とするところの文献史学とは異なるもう一つの新しい歴史学の提唱だった」のであり、「民俗を歴史資料として読み解く生活文化の変遷論であり伝承論」であったと捉え直すならば(新谷尚紀『民俗学とは何か 柳田・折口・渋沢に学び直す』、吉川弘文館、二〇一一年、五頁)、民衆生活文化史の探求という課題を共通にして、文献史学からするアプローチ、とくに典拠資料そのものに目を光らせてつ、注意をそそいで、柳田は⑧論文を重点的かつ批判的に検討したのであつたらう。⑧論文の余白には符号のみではなく、短いコメントが四箇所、付箋も一箇所(四三二頁)確認できることもそのことを示すものであり、ここではその評言のみ紹介しておこう。(一)三六六頁——「コンナオロカナ話/何ノ史料ゾヤ」、(二)三八二頁——「ツクリゴトヲ/例ニセリ」、(三)三八四頁——「コレハ誤?」、(四)三八七頁——「コレハ実物ヲ/少シカヘタモノ」。

以上、『民衆生活史研究』にみられた柳田の書き入れの概要について記したが、他の論考でも、日本歴史地理学会編纂の『歴史地理』四四ノ三「日本農民史」特集号(一九二四年九月)所収の西岡論文「王朝時代の農民の生活」には、下線がたくさん引いてあり、付箋も四箇所にいれてあることが確認できる。ちょうど翌二五年五月から早稲田大学で「農民史」の講

義をはじめめる時点であり、これも同様の課題において注目して読みこんだものであろう。

四

ところで、『定本柳田國男集』別巻第五（筑摩書房、一九七一年）の「総索引」でみるかぎり、公刊著作等において柳田が西岡虎之助およびその著作について言及したことはなかったようである。しかし、これまで漏れていた小文として、ここに西岡の『新日本史図録』内容見本に寄せた「推薦のことは」をあげることができるので、あわせ紹介しておこう（現在なお続刊中の伊藤幹治ら編集『柳田國男全集』でも該当巻に収録されていない）。一枚画面印刷のいたつて簡単なものだが、家永三郎、金森徳次郎、辻善之助、つださうきち、中島健蔵、柳田（肩書は「日本藝術院会員・日本学士院会員」としてある）の六人が書いていて（この組み合わせ、とくに家永・辻・つだ・柳田が顔を並べていること自体が興味深いところである）、柳田の「推薦のことは」はつぎの通り。

西岡虎之助君とは一面識もないが、かねてこの企てのあることは聞き及んでゐた。多くの文書や絵や図などといふものは、秘蔵されることが多く、公開されることは難しかった。今これらの資料が集大成され、困難な企画の成功したことは、まことに喜ばしい限りである。

私たちの祖先が、歴史のなかで、如何にして生れ、育ち、働き、産み、遊び、泣き、怒り、笑ひ、喜び、悲しみ、そして死んでいくかといふやうな実生活のあらゆる事象が、立体的な構想のもとに、系統的に生きた姿で再現される。私たちの求めてやまなかつた日本歴史の真実の相は、本書を俟つてはじめて展開されるに至つたと信じる。

本書によつて正しい歴史への理解が可能になり、新しい歴史教育や研究の目的が達成されることとならう。民俗学
研究の上にもまことに貴重な資料となることと思ふ。

柳田国男と西岡虎之助、少なくとも一九五〇年代初めまでは「一面識もない」関係ではあったが、「柳田文庫」による
かぎり、柳田は西岡の民衆生活本位の研究に注目し、その著書・論考を丹念かつ批判的に読み込んでいたこと、資料とし
ての文藝作品の扱い方には不満を感しつつも、やはり柳田にとっては、みずから求めてやまない「日本歴史の真実の相」
を意欲的に究明していこうとしている歴史家として、高い評価が与えられる一人であったことがわかるのである。

注

(1) 西岡虎之助については、二〇一〇年が没後四〇年にあたることから、西岡虎之助著作集刊行委員会によつて「西岡虎之助年譜・著
作目録(補訂版)(稿)」(『民衆史研究会会報』№70〈民衆史研究会五十周年記念号〉、二〇一〇年一月)が作成された。筆者も
もとめられてこの補訂作業に関係することになり、その一環として「柳田文庫」を調査した。また津田左右吉についても、「没後50
年津田左右吉展」が二〇一一年一月から翌年三月にかけて津田の郷里岐阜県美濃加茂市と早稲田大学文化交流事業として共催さ
れる運びとなつて、「展示ワーキング」の一員にくわえられ、津田の「生活・交流・影響」を主に担当、「柳田文庫」の津田左右吉
著書のなかで書き入れのある『神代史の新しい研究』『古事記及び日本書紀の新研究』『日本の神道』の三冊を成城大学民俗学研究
所の御高配もあつて展示することができた(同展示図録の三二頁では『日本の神道』のみ写真掲載)。他に『日本文藝の研究』もと
くに「神僊思想の研究」におびただしく赤ラインがはいつており、精読・検討の対象になつていたことを確認できる。家永三郎に
ついては、「柳田史学論」所収の『現代史学批判』(「謹呈／柳田国男先生／無礼の大罪を衷心より／謝しまつる／著者」との献辞あ
り)に、同論文を中心にして批判的書き入れが詳細にあつて、家永の批判を柳田自身がどのように受け止めていたかがわかる大い
に注目すべき内容である。津田と家永については続稿で扱うことにしたい。

(2) 西岡の「歴史と文学」についての考え方、史料としての積極的活用への必要性の主張は、『民衆生活史研究』の「はしがき」や同じく

『日本文学における生活史の研究』「はしがき」に簡明に記されており、『歴史と現在』所収の「歴史と文学」（『国文学—解釈と鑑賞—』二二七、一九五五年四月）などもあるが、ここでは西岡の長年の読書のしかたを語った「山窩の書」（『家庭週報』一九三七年八月二七日）から引用しておこう。「書を読まば天下第一等の書を読むべし」という言葉には、多分に犬儒的なおいがありそうである。かりに言いとしても私はその実行者ではない。興味のおもむくままに、懐工合のゆるすままに、多読また濫読である。文藝物であれ自然科学書書であれ、哲学書であれ、宗教物であれ、その範囲をかぎらない。しかもその読み方たるや、おおよそ著者が泣きそうな読み方である。つまりその書物なり著者なりの意図するところには、かかわりなく読むのであつてみれば、大抵の場合は第二義的なしそれ以下に墮する。（中略）この書（三角寛の山窩綺談「瀬降と山刃」——引用者）は実話風な雑書かも知れないが、私など日本民衆の歴史をしらべようとするものにとつては、なかなか多くの暗示や示唆を与えてくれる。（中略）本書は先にものべたように雑書であつて、あるいは未書というべきかも知れない。しかし未書のうちにも、なかなか捨てがたいものが多い。読む気もおこらない天下第一等の書よりも、読気をそそる未書の方が、読む者にたしかな心構えさえできておれば、ねうちが多いものかも知れない」。

(3) この内容見本の存在は、『津田左右吉全集』第二次刊行（一九八六—八九年）後に従事した早稲田大学図書館所蔵「津田左右吉伝記資料」の未整理資料の仮整理作業のなかで確認していたものであつたが、他に実物を手し得なかつたのでそのままとなつてしまつていた。が、前述の「没後50年津田左右吉展」では未公開資料からも展示することになり図録も作成されたことから、同図書館の理解を得て小稿で紹介するものである。なお付言すれば、津田の「推薦のことば」も、『津田左右吉全集』補巻二の「補遺」には未収録であり、他の未収録文献とあわせて、いずれまとめて紹介の機会を得たい。

(付記)

小稿の作成にあたり、とくに柳田国男の書き入れについて、筆者に判読困難であつた文字は、成城大学民俗学研究所の茂木明子氏に御示教を仰いだ。また、調査にあつては、同研究所の林洋平氏の親切な御協力を得た。特記してあつく御礼申しあげる。